



動物：ブタ，雌、年齢不詳（12ヶ月以上）。1978年10月16日帯広市家畜処理場で屠殺。

材料について：本例は十勝管内の某養豚場で繁殖用として飼育されていたが不妊のため廃用になった。生前は著しい削瘦が目立ち、屠殺後の所見では腎臓をはじめ腹腔内ならびに胸腔内の諸臓器に腫瘍性増殖巣が多発していたため、全部廃棄するとともに主要臓器の一部をホルマリンで固定した。固定材料の肉眼所見の概要は次のようなものであった。腎臓の表面は滑沢であったが、全面に亘って灰白色の大小の不規則形をした膨隆病巣が密発していた。断面においても皮質より髓質にかけて脆い灰白色の組織に占められ、腎臓固有の組織はその間に島状に残存していた。腎門リンパ節はウズラの卵大に腫大。肝臓では小葉間結合組織の不規則な増幅、脾臓では実質内に小白色病巣が多発していた。肺は水腫が強く、小葉間結合組織は幅を増し、小気管支ならびに血管を中心に不規則形の灰白色病巣が認められた。腸間膜リンパ節は血液の吸収が高度で、所により白色の索状～巣状の病巣を認めた。

組織所見：腎臓における灰白色の病巣は間質に主座しリンパ球浸潤を伴う組織球、巨細胞の集団よりなり(Fi-

g. 2), その間に糸球体、尿細管がまばらに散在し(Fig. 1), 所により、とくに血管を中心にヘマトキシリンに濃染する球状の小体が多数認められた(↑印)。この小体は可成り大小があり、一概に濃染するもの、層状を示すもの、中空のように見えるものがあった(Fig. 3)。これらの小体はPAS陽性、アルシアンブルーで青、トルイジンブルーで異染性を示し、ベルリンブルーで鉄陽性、コッサ反応も陽性であった。腎臓以外の臓器における病巣も間質に主座して増殖性の性格を示しており、量的に差はあったがヘマトキシリンに濃染する小体が多数存在していたことも共通していた。この小体の形、染色性は人のMalakoplakiaの時に出現するMichelis-Gudmann body と呼ばれるものに酷似し、この小体とともに主として膀胱に肉芽腫性の病変を起すのが本病の特徴とされている。本例がこの病と同類のものかどうかは更に検討を要するが、提出標本についての組織診断は「いわゆるMichelis-Gudmann body の出現を伴った肉芽腫性間質性腎炎」と診断した。

写真 1：HE×63 2：1の枠内拡大×400 3：ベルリンブルー×400